

Troubled Waters

死んでいく「命の湖」

カンボジアの「食」を支えてきた
トンレサップ湖をむしばむ乱獲と乱開発
政府の思い切った措置が求められるが

ジョー・コ克蘭

カンボジアのチノクトル村では、毎年春になると、近くのトンレサップ湖の水があふれて、道路も畑もすっかり水に覆われる。

だが、村人は平気な顔をしている。家は高床式なので、水没の心配はない。それに、大水は村に恩恵をもたらす。11月に雨期が終わって水が引くと、トンレサップ湖は魚の宝庫になるのだ。

漁師のホイ・ホー（45）は、粗末なボートでトンレサップ湖に漁に出て、生計を立ててきた。これまでは役人たちの横暴が最大の悩みのタネだった。警官は1日の儲けの10倍もの賄賂を要求することもある。

しかし最近、別の問題がもち上がってきた。年々、漁獲高が減っているようなのだ。「去年より水揚げは少ない。一昨年よりはもっと少ない」と、ホイは言う。

ホイのように、トンレサップ湖に頼って生計を立てている人は、400万人にのぼる。漁獲高は年間約23万トン。これはカンボジアの全漁獲高の約半分だ。

貴重な「天然の貯水池」

専門家によれば、トンレサップ湖の豊かな資源に陰りが見えはじめている。乱獲によって魚類の個体が小さくなっていることが確認されているし、この水域の代表的な魚であるメコンオオナマズもめっきり減った。

トンレサップ湖の漁業資源が枯渇すれば、カンボジア全体が大打撃を受ける。1100万の国民の60%が、この湖にタンパク源を頼っている。「トンレサップが死ねば、カンボジアが死ぬ」と、農林水産省の官僚マイ・サム・オンは言う。

地元の言葉で「大きな湖」を意味するトンレサップ湖は、いわば天然の貯水池だ。

春になってヒマラヤ山脈の雪が解けだし、南の低地で雨期が始まると、アジアを代表する大河であるメコン川は一気に水量を増す。

しだいに水かさを増しながら、メコン川は、中国、ミャンマー（ビルマ）、ラオス、タイ、再びラオスを通して、カンボジアに流れ込む。そして首都プノンペンの近くで、トンレサップ湖から流れ出すトンレサップ川と合流する。水量の多い時期は、水はこの川を逆流して湖に流れ込む。湖面は乾期の5倍に上昇する。

まかり通る汚職と密漁

トンレサップ湖は、こうして水をためることにより、下流域が雨期の洪水で水浸しになることを防ぐと同時に、乾期に水を供給する機能を果たしている。

「この湖のおかげで、カンボジアでは乾期でも穀物の栽培ができるし、ベトナムは農業用水を得ることができる」と、周辺国でつくる「メコン川委員会」の水利専門家ソック・サン・イムは言う。

トンレサップ湖は、メコン川水系の一部をなしている以上、流域の他の地域の影響を免れない。たとえば、ラオスと中国で水力発電用のダムが建設されたことで、魚類の回遊が阻まれ、繁殖サイクルにも影響が出ている。

しかし、湖周辺の開発も漁獲高減少の大きな原因になっている。違法な森林伐採により、丘が丸裸になって、泥が湖に流れ込むようになった。湖の周辺での農薬の使用は、魚類など生き物に悪影響を及ぼしている。

林業や農業の影響で、すでに湖の周囲の湿地が干上がりはじめている。その結果、湖に生息する魚類は産卵の場を奪われつつある。

要するに、あまりに多くの人間がよってたかって湖の恩恵にあずかろうとしていることが、問題の原因なのだ。カンボジアの人口はここ20年間で倍増しており、2020年までにさらに2倍に増えるとみられている。

湖を救うためには、政府の思い切った措置が必要だと、環境保護派は主張する。「現行の法律や規制ではまったくだめだ」と、メコン川委員会のヨーン・クリステンセンは言う。「政府は長期的な視野に立って行動する必要がある」

これまでのカンボジア当局の取り組みは、あまりにひどいものだった。法律や規制は、ないも同然。トンレサップ湖では、汚職や密漁、暴力がまかり通っている。違法な組織が密漁船から「用心棒代」を取るの当たり前だし、漁師同士の争いが暴力ざたに発展することも珍しくない。

自分たちの未来を破壊

縄張り争いには、地元警察や漁業監督当局、憲兵組織、海軍も加わっている。「誰も彼もが勢力争いをしている」と、政府の環境問題専門家サオ・バンセレイウットは言う。「そうやって、私たちは湖だけでなく、自分たちの未来も破壊しているのかもしれない」

さまざまな意味で、トンレサップ湖の状況はカンボジアという国のかかえる問題を象徴している。

この国は建前上は民主主義国だが、実際にはまだ封建的なシステムが残っている。プノンペンの権威主義的な中央政府と各地域の軍閥指導者は、何世紀も昔の権力者と同じように、暴力と脅しで人々を支配している。

チノクトル村も例外ではない。最近のある日、密漁が目と鼻の先で行われているのに、漁業当局の取締官たちは事務所から動こうとしなかった。密漁者は金属の棒を水中に入れ、自動車のバッテリーで電流を通して魚を感電死させている。

「密漁者を見つけるのは簡単ではない」と、ある取締官は言う。「大きな密漁船はスピードが速くて、やすやすと逃げられてしまう」

必要なのは長期的な計画

だが話しているうちに、しだいに本音を語りはじめた。密漁者をきちんと取り締まろうとしないのは、仕返しが怖いからだと言う。

「逮捕などしようものなら、腹を立てて中央の政府に話をもって行かれ、面倒なことになりかねない。ただではすまないかもしれない」と、ある取締官は言う。

開発は、湖の環境への配慮などおかまいなしに進められているようにみえる。

先日はフン・セン首相の側近が所有する会社が、湖の南端の土地30万ヘクタールでユーカリの植林を行う許可を受けた。環境保護派はこれに猛反発している。

「ユーカリは、地中の水と栄養分を吸い尽くしてしまう」と、環境保護団体グローバル・ウィットネスの職員は言う。

当局はトンレサップ湖周辺の地域で、石油と天然ガスの採掘を行う計画も立てている。

もっとも、政府もまったく動いていないわけではない。最近、トンレサップ湖の環境問題を検討するために、閣僚10人で構成する委員会を発足させた。

「政府は委員会をつくってばかりだと、いつも批判されるけれど」と、農林水産省のマイ・サム・オンは言う。「これが私たちのやり方なんだ」

カンボジア政府は現行のシステムで、できるかぎりのことをしているのかもしれない。だが、トンレサップ湖の開発と管理に関する長期的な計画を立てなければ、何をやったところですべて無駄に終わるだろう。

ニューズウィーク日本版

2002年1月30日号 P.48